



わたしの原風景②／新沢としひこ 2

耳で聞く小さなおはなし①「ホンのちょっぴり」／村中李衣、石川えりこ 3

創作の黎明期をひもとく『かこさとしと紙芝居』／鈴木万里 4

親子はじめての共作紙芝居『うさぎとかめ』／やべみつのり、矢部太郎 6

おさんぽ自然観察⑤／いしもりよしひこ 7

イラスト／岡本順

突然の子離れ

俵 万智

子どもが小さくて世話に追われているときは、「1日を全部自分のために使ってみたいものだ」なんて思うこともあった。乳児のころは、ミルク、おむつ、寝かしつけ……。どんなに筆が乗っている時でも息子が昼寝から覚めれば、原稿を中断せざるを得ない。

幼児期は、お迎えや習い事など、子どもの時間割が優先で、そのあいまいに仕事を、縫うように入れていた。熱を出されて、すべてが飛ぶというようなこともあった。小学生になると少し時間にゆとりができたが、子どもが最優先であることに変わりはない。

そういう暮らしが身についていたわけだが、6年前、一変した。息子が見学した中学校をいたく気に入り、絶対ここに入りたいと言う。全寮制の中高一貫校である。親離れ、子離れという言葉聞いたことはあったが、徐々に訪れるものだと思っていた。それが、いきなりやってきた。

ふいうちでくる涙あり小学生下校の群れとすれ違うとき

つい数か月前まで小学生だった息子が、目の前からいなくなった。それくらいの年齢の子どもたちを見ると、こみあげてくるものがある。ちなみに、学校や寮へのスマホの持ち込みは禁止で、連絡をとるには決まった時間に呼び出しをお願いするしかない。もしくは子どもが公衆電話を利用する。

相部屋の感想聞けば「鼻くそがほじれないんだ。鼻くそたまる」

2人部屋で、うまくやっているだろうかと心配は募るばかりだが、こちらの聞きたいような話は返ってこない。

はじめの頃はホームシックにもなったが、高校生の今は、週末でもめったに帰省してこない。気がつけば、「1日を全部自分のために」という願いは、あっさり叶えられていた。

けれど、いざそうなってみると、なんだか落ち着かない。絵本を読んできせがまれたこと、毎朝の弁当づくりが大変だったこと……。いつ終わるんだ！ と思っていたさまざまなことが、いつのまにか終わっていた。

最後とは知らぬ最後が過ぎてゆくその連続と思う子育て

「最初」は意識することが多いけれど、意外と最後は気づかない。そして今、私の日々は次の1首に収斂される。

子のために切りあげることなくって一本の紐のような一日

わたしの原風景

22

新沢としひこ

しんざわ としひこ
シンガーソングライター



イラスト／平澤朋子

「原っぱ」という言葉は現代では死語になってしまったように思う。僕が子どもの頃、家のすぐそばに原っぱがあった。雑草が生い茂った広い空き地で、立ち入り禁止でもなく近所の子どもたちはよくそこで遊んだ。遊具があるわけでもなく、粗大ゴミがちょっと放置されていたりした。友達の中には「あそこの原っぱは危険だから遊んではいけない」と親に言われている子もいた。高学年の男子達が段ボールや木材で作りかけた秘密基地の残骸のようなものもあって、すさんだ風が吹いているものの、不思議な魅力もある場所だった。

入口のこんもりした土手には猫じゃらしが揺れている。土手を下っていくとハルジオオンが群生している。その向こうに秘密基地の残骸があり、オオバコがたくさん生えていた。それ以外の場所は、背の高い名も知らぬ雑草があまりに茂っていて、子どもが足を踏み入れることは出来なかった。カマキリもいた。バッタもいた。モンシロチョウも飛んでいた。名前を知らない小さな虫もたくさんいた。腐材や、ガラクタも放置されていて、下手に触ったら怪我をしそうな物もたくさんあった。無秩序が保存されて、何もかもがごちゃごちゃと共存しているような空間だったのだ。その危険な感じが、冒険心をそそって、僕はいつもちょっとドキドキしていた。

あんなスペースが今の東京にあったら、立ち入り禁止になっているに違いない。僕が高校生になるころ、そこは整備されて、美しい児童公園になってしまった。その公園を通るたびに、僕は「原っぱ」を懐かしく思った。「原っぱ」にくらべると、この清潔で安全な児童公園は何も楽しくないように思えた。

芝生の広がる原っぱ風の美しい公園ではなく、何も整備されていない空き地の「原っぱ」を幼少期に実際に経験していて、僕は本当に良かったと思う。今も心の中に「原風景」としてその「原っぱ」はちゃんとある。そして時々、「原っぱ」が「遊びのおいで」と声をかけてくれているような気がするのである。

耳で聞く小さなおはなし⑪

「ホンのちょっぴり」

文・村中李衣 絵・石川えりこ

しずかうり

マコちゃん（四歳）の話、聞いてくれる？ お父さんとお母さんとお兄ちゃんとマコちゃんの四人で晩御飯を食べていたときのこと。みんなでお鍋を囲んでワイワイ楽しくしていたのに、急にお父さんとお母さんが言い合いを始めちゃったんだって。最初のうちは「何言ってるの」「そっちこそなんだよ」くらいだったのに、だんだん口調も顔つきも険しくなっていく。お兄ちゃんは下を向いて黙って唐揚げを食べてる。マコちゃんは椅子からだんだんずり落ちていって、いつのまにかテーブルの下に潜り込んでお膝を抱えて、いっとうずくまっていたんだって。

でもね、突然テーブルの下から出て、テーブルの周りを歩き始めたの。魔法使いのおばあさんみたいに背中を丸め、買い物がごをぶら下げるように右腕を曲げて。「しずかはいいりませんか？ しずかはいいりませんかあ〜」。お母さんとお父さん、顔を見合せて、小さい声で「ひとつください」って言ったんだって。「はい、ひとつですね」。マコちゃんは、にっこりするど、見え



ないカゴの中からへしずか〜をひとつだしてお母さんののひらに。それからお父さんののひらにも、ひとつ。お兄ちゃんが「おれにもくれ」って。それでお兄ちゃんにも、ひとつ。今まででいちばん静かな夜になったんだって。おしまい。

実はね、マコちゃんは私の娘。喧嘩してお母さんは、私でした。「しずかにして！」って言えなくて、しずか売りになることを思いついたのは、食卓の穏やかな空間が失くしたくない大事なものだっただけ。なかなかやるなと思ったけど、『めいたんていサムくん』のサムくんは、赤ちゃんの頃大好きだったハンカチのにおいを嗅ぐだけで名探偵に変身しちゃうんだから、これもすごい！ どちらか、失くしたくない大事なものがちゃんとあるっていうのが、ひらめきパワーの源だね。



めいたんていサムくん
那須正幹・作
はたこうしろう・絵

『どろぼうがっこう』（偕成社）「だるまちゃん」シリーズ（福音館書店）「かこ・さとし かかくの本」シリーズ（童心社）などで知られる絵本作家、かこさとしさんが生涯に創作した作品は六百を超えますが、その四分の一近くが紙芝居であったことはあまり知られていません。大学卒業後、かこさんはセツルメント活動（*）を通して毎週のように手描き紙芝居を用意し、子どもたちに演じていました。その日々が、その後の創作の大きな力になっていきました。

かこさんの紙芝居に関する仕事をまとめた『かこさとしと紙芝居 創作の原点』が八月に刊行されました。かこさんの長女である著者・鈴木万里さんに、お話を伺いました。

●「子どもたちのために」という決意

十九歳だったかこさとしは、敗戦の日以来、自分のそれからの人生を何のために生きるのか、悩み苦しみ模索し続けていました。軍国主義から民主主義へ、急

て、軍人を志し戦争の真の姿を深く考えることのなかった自分への反省がありました。無邪気に遊ぶ子どもたちの姿を目にするうち、子どもには自分で考え、自分で判断できるようになってほしい、健康やかに成長してほしい、それならば自分が生き残った意味もあらうと思ひたり

ました。その決意を胸に、子どもたちのためになることをしようと、社会人となつてから、かこはまず人形劇や紙芝居の勉強を始めます。大学時代に演劇研究会に所属していたかこは、演劇に近く、一人でもできる機動性を持った紙芝居という形式に惹かれたようです。その頃に作

創作の黎明期をひもとく

鈴木万里

すずきまり／かこさとしの長女として神奈川県に生まれる。二〇〇三年より加古総合研究所に勤務し、父の仕事を支え続けた。現在は夫とともに著作権管理のほか、講演活動などを行っている。

『かこさとしと紙芝居』

かこさとしと紙芝居

創作の原点

かこさとし・鈴木万里 著
KAKO SATOSHI SUZUKI MARI



かこさとしと紙芝居 創作の原点
かこさとし・鈴木万里／著
定価2420円（本体2200円＋税10%）



『うさぎのターちゃん』（川崎セツルメント／1953年）



『私たちのまちとつるつるめんと』（川崎セツルメント・日本幻灯文化／1953年）

った紙芝居は、海外の有名なお話を題材にしたもの、宮沢賢治の童話のオマージュ、あるいは平和への希求を反映した大人向けの作品などもありました。絵は非常に凝ったデザイン性の高い絵もあれば、墨一色の力強い線画など多様で、絵本とは異なったタッチにきつと驚かれることでしょう。かこは意図的に実験として、題材、表現方法や形式に思いつくかぎりの工夫を試みていました。そうこうするうち、セツルメント活動に出会います。一九五一年、かこが二十五歳の時でした。

●子どもたちとの「合作」紙芝居

読者の中には「セツルメント活動で子どもたちに紙芝居を見せていて、それが後に絵本になったのですね」と、かこの創作について「セツルメント」「紙芝居」「子ども」「絵本」という四つのキーワードで表現してくださる方がよくいます。確かに、絵本を作るようになるとは思ってもよらなかった二十代のかこは、セツルメント活動の子ども会のリーダーとして、子どもたちのために物凄い勢いで紙芝居を作りましたが、そこにはもう一つのキーワードがありました。「遊び」です。子どもたちには自分たちで工夫して、遊びを作りだしていった欲しい、それが

自主性、創造性を育むと考えたからです。仲間として、気持ちを一つにし、遊びに向かう。その準備として、かこは子どもたちが一緒に遊んで紙芝居を見る時間を作りました。こうして始まった紙芝居上演ですが、かこは子どもたちにも紙芝居を作ってほしいと考えていました。その思いについても、かこは自身の言葉で書き残しており、『かこさとしと紙芝居』に再録しています。

セツルメント子ども会で絵を描く指導を始めた当時、わら半紙が一枚二円、毎月十円の会費を集めていました。子どもたちは毎回三枚程度の絵を描くので会費では足りず、かこが補っていたそうです。時折、内輪で展示会を開催してかこが講師し、やる気を出させていました。今でも子どもたちが描いた百枚以上の絵が残っていて、かこの講評がついているものもあります。

子どもたちの絵を使い、セツルメントの勉強会で書いた子どもの作文を組み合わせて誕生したのが幻灯『私たちのまちとつるつるめんと』（一九五三年）です。当時、無償で子どもたちに勉強を指導したり、子ども会で遊んだり、地域の運動会や遠足などもしていたセツルメント活動をいぶかしく思う大人の思惑を敏感に受け止めた子どもたちが、セツルメント

と言わずに「つるつるめんと」と言っていたことをかこが面白がって、その呼び名を採用したのです。

本書では、この幻灯をはじめ、子どもたちとの合作とも言えるような紙芝居も含め余すことなく紹介しています。

かこが作った紙芝居の全てが子どもたちに受け入れられたわけではありませんでした。せっかく徹夜をして作っても、興味がわかないものならば、子どもたちの姿はいつしか紙芝居の前から消えていったそうです。だからこそ、今度はもっと見てもらえるものを作ろうと、かこは張り切りしました。絵本として知られる『どろぼうがっこう』『わっしょいわっしょい』『ぶんぶんぶん』『あおいめくろいめちやいろめ』『とんぼのうんどろかい』（いずれも偕成社）の元となった紙芝居はどんなものだったのか、ご覧いただけたらと思います。

絵本と紙芝居は似ている点もありますが、それぞれに特色があり、かこは同じ内容の物語であってもその構成や表現方法を変えていました。作品からそれを見ただけの実例も、取り上げています。

●かこ作品の多面的理解のために

本書には初公開の絵や、これまでその

存在がどこにも記載されていなかった資料も多く登場します。遡ること四十年前の「母のひろば」一七九号から一九二号にかこが執筆した「紙芝居覚え書き」など紙芝居の歴史的考察なども収め、資料的価値が非常に高い本になりました。また、かこを知る四人の方々によるエッセイも大変興味深い指摘に満ちています。

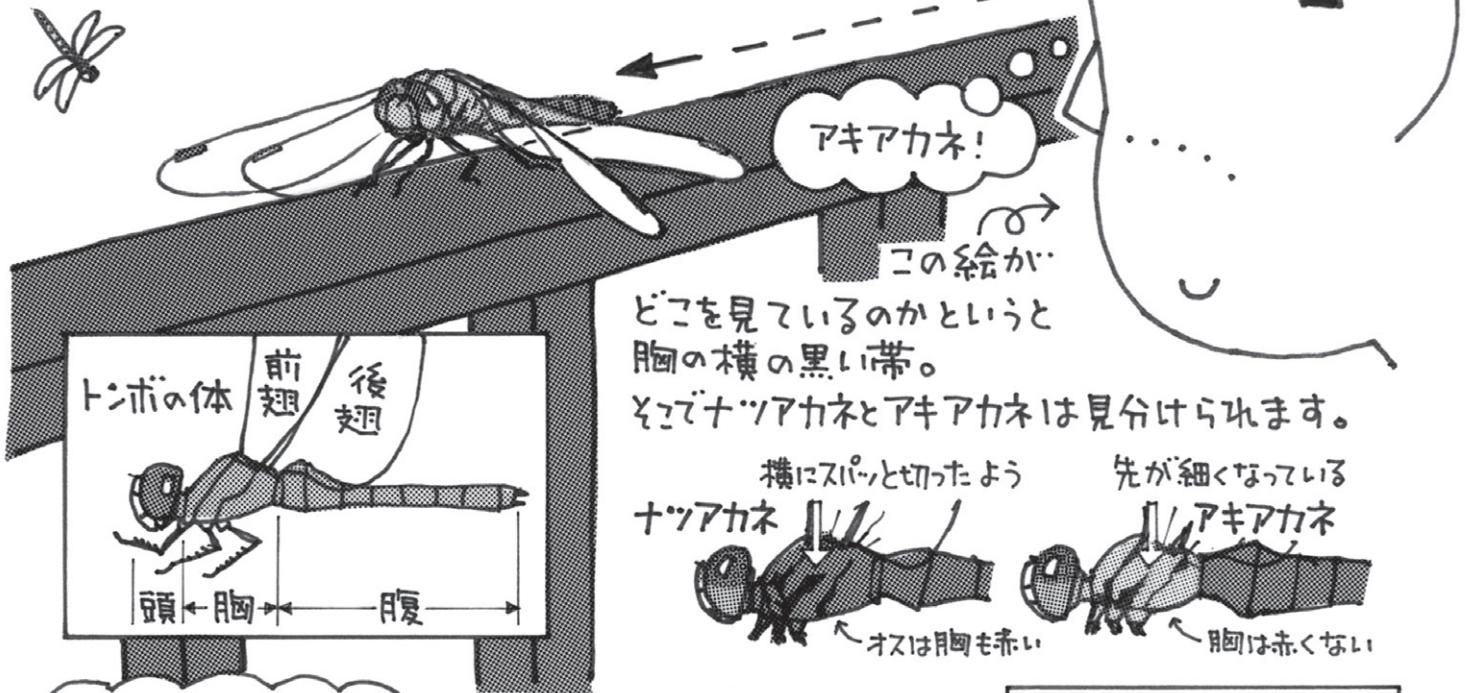
かこは生涯を通じ、およそ九百回を超える講演をしていましたが、その内容はセツルメント時代に子どもたちから教わった遊びの様々なことについてが中心で、自らの作品についてはあまり語ってきませんでした。それで、かこ作品に興味をお持ちいただいている皆様には、その創作の原点であった紙芝居についてお話しし、絵を見ていただければと思い、かこ亡き後、かこの長女として私が講演の機会をいただいた折には、かこの手描き紙芝居をご紹介してきました。しかし、かざられた講演時間の中で全てをお伝えすることはできませんでした。

今回の出版を機に、かこの紙芝居に関する創意工夫に満ちたさまざまな仕事をじっくりとご覧いただき、かこが「紙芝居」をどう捉えていたか、どんな可能性を見出していたか、あらためて知っていただく機会になればと思っています。

おとしぼ 自然観察 ⑤

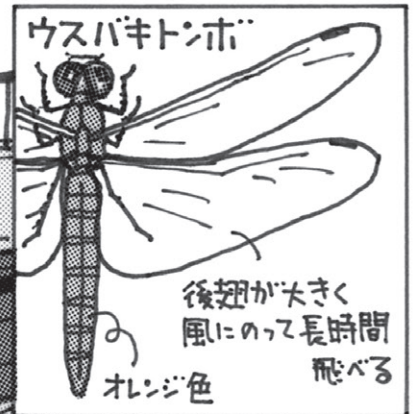
いしもり
よしひこ

秋というと赤トンボが「思いうかぶ」こともありますよね。
代表的な種にナツアカネとアキアカネがいます。
どちらも夏前にヤゴ(幼虫)からトンボ(成虫)になっていますが、
成虫が成熟して身近に見られるのは夏の終わりからです。



秋、たくさん数で川面や空き地の上をほとんどとまらないで、いったりきたりフワフワと飛んでいるのはウスバキトンボ。

ひたすら北上するようにプログラムされている命...



南方で生まれたものが北上開始。春に日本に到着して、秋まで世代を重ねながら北海道にまで達します。

でも寒さに弱く日本の冬を越せません。

それで、冬になると卵、幼虫も含め全滅してしまうのだそうです。

それを毎年くりかえしているのです。いつかくるであろう生存に適した気候変動を種として待っているのだと思うな...。(南方に留まる群もいるので絶滅しない)

9月の新刊図書！

あかちゃん ととととと

あさだ おはよう

三浦太郎／さく・え

定価880円（本体800円＋税10%）



にんじんのかあさんの時計は、リリリリリ。
だいこんのとうさんの時計は、びびびびび。
時計が鳴ったら、みんなおめめばっちり！

あかちゃん ととととと

こんにち、わ！

三浦太郎／さく・え

定価880円（本体800円＋税10%）



プチトマトの赤ちゃんが母さんとさんぽして
いたら、やさいやくだものに会って、こんに
ちは！ 最後は長ねぎの姉さんがきて……！

絵本・こどものひろば

かつおどりと あほうどり

谷口國博／作・絵

定価1430円（本体1300円＋税10%）



海のうえにかつおどり島とあほうどり島がありま
した。かつおどりが隣の島をのぞくと、あほうど
りさんはいつでも楽しそうに暮らしていて……。

いしかわこうじさんの絵は温かみを感じられ、か
わいくて癒される動物たちが多く、とても好きで
す。動物の絵と、名前が書いてある本は他にもた
くさんありますが、図鑑とはまた違う説明や、子
どもも楽しめるしかがつについて、楽しく読み
ながら動物を覚えることができます。次回作も案



どうぶつしかけえほん
かわい！ どうぶつパーク
いしかわこうじ／さく
定価1045円（本体950円＋税10%）

読者の声

しみにしています！

（大阪府 A・F 三十二歳）

童心社の絵本
やんばるの少年
たじまゆきひこ／作
定価1760円（本体1600円＋税10%）



朝の読書の時間を使って、小学五年生にボランテ
ィアで『やんばるの少年』の読み語りをしました。
子ども達は話に集中して、静かに聞いてくれました。
た。私自身は、最初、オスプレイの怖さが印象に
残りました。何度も読むうちに、自然破壊をこれ
以上許してはいけないという思いになりました。
やんばるの森にしかない生き物たちを守ってい
くことが大切だと感じました。

（広島県 O・M 六六歳）



イラスト／岡本順

2021年9月15日発行（毎月刊）

母のひろば 第688号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03（5976）4181
03（5976）4402（編集）
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。
下記QRコードからもお申し込み
いただけます。見本誌（無料）と振込用
紙をお送りいたします。

見本誌に同封
されている振
込用紙で購読
料をお支払い
いただけます
と、手続き完了
となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。



あとがき

●この夏は悲しい知らせが続きます。
童心社の多くの本の装丁や、この
「母のひろば」のデザインもしていた
だいてきた谷口広樹先生が、8/30、
亡くなりました。第一線で大活躍さ
れている最中の突然の訃報で、あまり
にショックです。紙芝居『ちっちゃい
こえ』等、そのお力なくしては実現し
なかったろう作品も沢山あります。谷
口先生、ありがとうございました。◎

●443号から20年間にわたり、本誌
のデザインを手掛けて下さっていた
谷口広樹さん。つい先日まで今号の
やりとりをしていたので、その訃報に、
ただただ驚くばかりで、いまだに信じ
られません。「母のひろば」だけでは
なく、一緒に絵本の仕事もできて幸
せでした。ハスキーなお声と柔らか
な笑顔の谷口先生が大好きでした。
心よりご冥福をお祈りします。 ㊦